

2024年度 学校評価（自己評価）報告書

	評価単位	評価のまとめ
教育課程	1. 教育目標	・教育目標である「子どもへの願い」は、幼児の実態に即したものであり、変わらずに大切にすべき根幹であると教師間で共通理解し、年度初めや、学期ごとの保護者会、また、研究便りの配布を通して、その都度、保護者に周知し、共通理解を図るよう努めた。
	2. 教育課程の編成	・研究テーマ「つくるが生まれる暮らし」という観点から改めて教育課程を見直し、修正を加えた。また、教育目標「子どもへの願い」と併せ、教育課程についても、年度当初に保護者に配布し、共有することで、園の教育について保護者とともに構築していく体制づくりに努めた。 ・日々の対話型マップ記録については、保育の省察を深め、教師間の連携や子ども理解の深まりにつながり、保育計画にもつながっているという効果を感じている教師が多い。一方で、学年間での振り返りとどまり、学年を超えた共有には至らない点が引き続きの課題であり、検討を要する。
	3. 年間保育日数 ・時数	・年度当初の分登登園は、昨年に引き続き実施したが、子ども一人一人と丁寧に関わることができ、子どもたちが安心して園生活を始める上で有意義である。ただし、今年度は、曜日繰りの関係で、開園日程についてやや無理があった。次年度は余裕をもった日程になるよう検討を要する。 ・登園時間については、学年ごとに時差を設けたことで、玄関の混雑を防ぐことが出来、安心して園生活をスタートさせることにつながった。 ・5歳児の週4回の弁当に関しては、子どもの実態にも即しており、妥当であったが、4歳児の弁当の回数を3回から4回に増やす時期については、行事との兼ね合いなどを踏まえ、再検討の必要がある。
	4. 教育活動と その成果	・「ひと」「もの」「こと」に着目し、園児の遊びや生活の姿を見取り、省察していくことは、保育内容や教師の関わり、環境構成を丁寧に考えていこうとする教師の意識の向上につながっている。 ・対話型マップ記録の共有や、定期的な実施している拡大打合せにおいて、非常勤講師との対話の時間を設け、異学年の様子や教師一人一人の思いや考えの共有を図っているが、十分な時間が取れないことも多い。情報共有のあり方に関しては、さらなる工夫を検討する必要がある。 ・研究テーマ「つくるが生まれる暮らし」を踏まえ、子どもたちの遊びの様子や発達を考慮した上で、必要な教材の準備や、提供するタイミング、環境構成等について改めて丁寧に考える意識をもつことができた。
	5. 行事	・実施した行事については、学期ごとの振り返りを丁寧にすることで、次年度への改善につながっている。 ・創立記念の集いや春を祝う会など、保護者参加の行事を増やしたことは、保護者の園の教育活動への理解や安心、さらなる協力の推進へとつながった。 ・運動会については、引き続き4・5歳児の参加とし、3歳児は翌週の親子で遊ぶ日に、親子で一緒に体を動かす機会をもったが、子どもたちにとって無理がなく、親しめるものとなり、保護者にとっても次年度を楽しみに思う機会となっている。今後も継続していきたい。 ・3・4歳児合同の秋遠足については今年度初の試みであったが、職員体制などを十分に考慮し、今後の実施を検討していく必要がある。 ・郊外園での卒園式や大根掘りでは、今年度も収穫物をその場で調理し、親子で味わう機会ももつことができ、有意義であった。
	6. 進路指導	・年長児一人一人の育ちを教師間で共有し把握していくことで、小学校へと接続していけるよう連携して保育に当たる体制作りは構築されてきている。 ・年長児の担当教師の負担は大きいと、そのことを踏まえ、教師間で連携して業務を推進していく体制づくりに努めた。 ・説明会や個人面談などにより、子どもたち一人一人に即した進路のありようを保護者と共に考えていくように努めた。 ・現在の内規について、園内での共有を深め、今後の幼小連絡進学の方針性を含め、内規を見直すなど、検討の必要がある。
	7. 研究・研修	・園内研究については、引き続き「つくるが生まれる暮らし」を研究テーマに据え、子どもの「つくる」姿を見取った事例検討を中心に進めた。本学の辻谷真知子教授のご指導のもと、実践を振り返る形で考察を深めていったことは、子ども理解や保育のありようをより深く捉えていく上でとても有意義であり、2年分の研究内容を紀要にまとめられたことは、大きな成果である。一方、保護者からは、研究内容についてわかりにくいという声が多く、今後、保護者への発信については、工夫していく必要がある。 ・公益財団法人前川財団の「家庭教育研究及び実践活動助成」を受け、「対話による保育記録の成果と課題」についての研究を引き続き実施した。研究の一環として、今年度も、日本で開催された環太平洋乳幼児教育学会にて発表した。 ・2月に公開保育研究会を実施。今年度も研究発表はオンデマンド開催としたが、完成した紀要を資料として参観者に配布することができた。学年別協議会、全体会、共に、参観者を交えた対話の時間を多く設けることに配慮した。全体会では、昨年に引き続き、本学の宮里眺美教授の進行のもと、各園での情報交換、学年別協議会での内容の共有他、発行した紀要の内容にも触れながら、研究テーマにつながる子どもを真ん中においた有意義な討議の時間となった。 ・公開保育については、たくさんの参加応募があり、抽選としているが、広く多くの方への発信の必要性については、今後検討の余地がある。 ・市内の三園合同研究会（対面）」は実施し、それぞれの園での情報交換の場に加え、子ども理解を深め、保育の質の向上を目指す上で有意義な時間となっている。一方、文京区の幼稚園との交流、研究会の実施は滞り、研究の地域への発信が今後の課題である。 ・日本保育学会では、自主シンポジウムや口頭発表を行った。多くの参加者があり、本園の保育内容や保育記録の工夫について、その発信に努めた。 ・他園（富山・千葉・山梨など）への参観などを通し、各保育施設での保育内容や保育環境、記録の取り方の工夫などを知り、学びにつながった。
A 学校運営 （教育課程を支える諸条件）	1. 経営・組織	・勤務分掌は、少ない職員体制のもとで各人が責任をもって執行するよう努めたが、任期付き職員が不在の中、教師一人一人の負担は大きかった。 ・勤怠管理システムの活用により、出勤・退勤時間の記録、残業申請や有給申請を効率的になった面はあったが、職員の人数が少ないこともあり、残業や家庭に持ち帰っての仕事は依然として多い。また、超過勤務の基準が曖昧であり、申請に困難さを感じる。
	2. 出納・経理	・預かり金については、区分を減らし（一般と行事とを分けず）、より柔軟に必要に応じて購入できるようになった。 ・物価の上昇を受け、物品の購入（行事の計画などの際には預かり金担当に確認しながら進めることで、保育に有効に活用できるよう努めた。 ・常勤の事務職員が不在なため、担当教師の負担が大きいのは引き続きの課題である。
	3. 施設・設備	・園舎内の木製家具の修理や塗り直しを引き続き実施した。園環境の美化につながり、モノを大切に扱う意識の育ちが見られる。また、冬休みには、同窓会の働きかけで、卒業生を対象に木製家具や園庭の固定遊具の手入れを実施した。次年度以降も引き続き実施していく予定である。
	4. 健康	・保護者対応においては、担任だけでなく副園長、養護教諭、スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカー等、複数人で共有していくことが、保護者の安心につながっている。 ・スクールカウンセラーへの相談窓口については、保護者が申し出やすい方法を検討する必要がある。また、子育て懇談会に関しては、年間予定に組み込んで今後も継続して実施していくことが望ましい。 ・巡回指導では、継続して同じ幼児を観察、指導していただくことで、話し合いの内容が深まり、子ども理解につながる有意義な時間になった。 ・園内感染等についての対応については、今後も安心できる保育環境の保持に配慮し、園児の健康、及び教職員の健康管理について、引き続き真摯な取り組みを目指す。
	5. 安全	・随時安全点検を行い、定期的に植物の剪定などの環境整備を行っているが、土砂流れや地盤の緩みなどについても、慎重に確認しつつ、園内環境が安全に保たれるよう努めていく必要がある。安全点検の定期的な実施がなかなか徹底できず、やり方などに関しては、引き続き検討の余地がある。 ・園庭の樹木に関しては、樹木医の判断を仰ぎ、園児の安全を最優先に、随時、剪定や伐採などを実施している。園庭の竹垣や土留めに関しても、修理が必要な箇所が多くあり、修繕予定ではあるが、園庭環境については、今後も引き続き長期的な見直しをもって検討していく必要がある。 ・避難訓練に関しては、計画的にすすめ、その時々の子どもの様子や丁寧に見取るとともに、起きうる災害を慎重に想定することで、子どもにとって無理なく、かつ十分な訓練内容を実施できるよう心がけた。
	6. 情報	・大学主催の研修を受けることで、情報管理の重要性を確認でき、情報管理に対する意識向上につながっている。 ・ホームページを随時更新し、必要に応じて見やすく整理することで、情報が正確に発信されるよう努めたが、内容に関しては園内で検討していく必要がある。 ・園児の個人情報に関しても、随時チェックを行い、流出防止に努めた。 ・データの整理や保存に関して、見直しを図る必要がある。また、今後のICTを活用した取り組みの推進を見直し、園内のWi-Fi環境を整えていきたい。
	7. 開かれた学校	・保護者アンケートについては、昨年よりWEBでの実施としたこともあり、全員の保護者の協力を得られた。 ・同窓会関係の催しについては、昨年に引き続き、内容等に改善を加え、ホームカミングデイ、ボランティアデイ共に有意義な開催となった。 ・公開保育研究会を2月に実施。研究内容について事前に配信したことで、それを踏まえた上で、参観していただくことが出来、研究内容や保育の実態を重ねることで、午後の討議の時間の充実につながった。 ・文京区など近隣地域に開かれた研究会の実施には至らず、今後検討の余地がある。
	8. 入園検定	・対面での説明会を実施し、ホームページと合わせて情報公開した。内容に関しては保護者のニーズを受けとめつつ、わかりやすい表現を工夫し、間違いのないよう十分に確認しつつ発信していくよう今後も努めていきたい。 ・検定終了直後に振り返りの時間をもち、記録を丁寧にまとめ残していくことで、次年度の実施、改善につながるよう努めた。 ・受検者数の減少が進み、今後の検定の持ち方について長期的な見直しが必要である。また、判定基準等、内容については、さらに検討を重ねていきたい。

		<p>・保護者会や個人面談では、家庭・園での様子を共有しながら、対話を重ね、共に育ち、育てる関係が築けるよう努めた。一方で、心配なこと、不安に思うことをすぐに言い出せずに悩んでいる保護者が少なからずいることがアンケートを通して伝わってきた。話しやすい雰囲気づくりに配慮し、多様な方法でコミュニケーションが図れるような対応を検討したい。</p> <p>・写真記録のファイルは、子どもの様子や生活の流れを理解する上で役立っているようだが、付箋紙によるやりとりに関しては、参加する保護者には依然として偏りがある。園からの一方的な発信にならぬよう、双方向の対話的な関係構築のために有効かつ多様な方法を検討したい。</p> <p>・園児同士のトラブルやけがの対応についての経緯、子どもへの接し方に関する教師の考えなどがわかりにくいという保護者の声がある。保護者が安心し、相談しやすい園の雰囲気作りの工夫が必要である。</p> <p>・園長、副園長との懇談、スクールカウンセラーへの相談、第三者窓口を設けてほしいなどの要望があり、園の対応や教育内容に関して、保護者が忌憚なく相談できる方法を多様に設けていくことで、保護者との信頼関係の構築を図ってきたい。</p>	
	9. 保護者との連携		
B	大学との連携	1. 連携研究	<p>・幼小連携部会では数回それぞれの保育、授業の様子を参観する時間を設け、参観時に見られた子どもの姿や卒園児のそれまでの姿とこれからの繋がりなどを意見交換する中で、子どもの育ちについて語り合い、理解を深めることにつながった。隣接する小学校との交流は、今後も工夫して検討していきたい。</p> <p>・エシカル部会では、他附属校の様子を知る機会を得たとともに、幼児期から高校生までの育ちの連続性を学ぶ機会となった。また中学生との校種を越えた継続的な関わりが生まれ、子どもの体験の充実に繋がった。</p> <p>・大学のSDGs学生委員会との連携によるBio Blitzでは、5歳児が学内を散策しながら生息する植物を観察する機会を得ることができ、有意義であった。また、今年度もフードドライブ活動にも参加した。園では昨年同様に、在園児の保護者と本学の学部生とで、集まった食品の集計などを担当したことで、連携が図ったが、今後、他附属での取り組みについても共有しながら進めていきたい。</p> <p>・学内のナサー、こども園との三園合同研究会では、乳幼児期の子どもへの理解を深める機会となり、保育を多角的視点から振り返る時間になっている。</p> <p>・コンベンション育成開発研究所との連携により、コンベンションの観点から幼児の遊びや暮らしの姿を分析することで、幼児理解や援助のありようの考察を深めた。</p>
		2. 授業交流	<p>・昨年に引き続き、子ども学フィールドワーク、教職実践演習、公認心理師実習などの幼稚園観察実習を受け入れた。その都度、学生及び指導教官からの観察記録を共有することで、日々の保育を新たな視点で見られる機会となり、本園にとっても学びにつながっている。</p> <p>・実習生との関わりは、子どもの体験の広がりにも繋がるとともに、指導教員にとっても新たな視点を得る機会となっている。</p> <p>・大学の授業への協力は、自分自身の自己研鑽ともつながり、有意義だと感じている。負担にならない程度に今後も受けていきたい。</p>
		3. 教育実習	<p>・実習生と丁寧なコミュニケーションをとりながら、教員の専門性を指導すると共に、魅力的な職業であると感じられるような指導を心がけた。</p> <p>・他附属と合わせて成績をパソコン入力できるようにデータを残し、次年度に引きつぎたい。</p> <p>・実習生の関わりは、子どもの体験の広がりにも繋がるとともに、指導教員にとっても新たな視点を得る機会となっている。</p> <p>・実習生の負担軽減のため、Wordでの日誌作成が可能となった。体裁が揃い、教師にとっても読みやすかった。</p> <p>・体調不良の学生に対しては、学務課とも報告、連絡、相談をし、実習の延長、振替の対応をとった。</p>
		4. 専門委員会	<p>・職員会議で各専門委員会での議事録を共有し、検討内容等、共通理解を図った。議事録の共有に関しては、保管方法なども含め徹底していく。</p> <p>・他附属校との情報交換を丁寧に行い、園内で共有してから検討していくことで、スムーズな連携が行われるよう努めた。</p>
		5. 大学の講義担当	<p>・保育内容「人間関係」において、具体的な事例を取り入れ、幼児・保護者・保育者など、様々な関係性や視点を伝え、幼児教育の理解に努めた。</p> <p>・大学の授業への協力は、自分自身の自己研鑽ともつながり、有意義な機会となっている。負担にならない程度に今後も受けていきたい。</p>
		6. インターンシップ	<p>・今年度は希望者があったものの、1名であった。教育実習とは異なる職業体験の場として学生にとっても有意義であることを伝える工夫が必要。</p>
社会貢献	1. 参観・研修受け入れ	<p>・昨年に引き続き、今年度も国内外の参観者を数多く受け入れた。様々な園や海外の幼児教育に触れる貴重な機会となった。</p> <p>・参観者の記録や感想を共有することで、園の研究の発信につながっていることを実感でき、また、保育について新たな視点をもらえる機会にもなっている。</p>	
	2. 公開研究会開催	<p>・昨年同様、申込みやアンケートはWEBで対応。研究発表はオンデマンド配信とし、当日は、参観者との対話の時間が十分に確保した。</p> <p>・講師を含め学年で丁寧な打合せをしたことが、研究会のスムーズな進行や内容の充実につながった。</p> <p>・参観する際には、研究テーマを前提として、子どもの姿と、環境及び教師のかかわりについて付箋でコメントをもらい、それを元に学年別協議会では話し合いをすすめたことが、研究を深めることにつながった。</p>	
	3. 現職研修	本年度は該当項目なし	
	4. 途上国支援	・JICAの参観を今年度も実施した。再開した。子どもたちの日常の様子を見ていただき、やりとりする時間をもつことができ、有意義であった。	
	5. 出版活動	<p>・ICT活用事例を掲載した書籍については、事例提供を行った。</p> <p>・研究テーマ「つくるが生まれる暮らし」について、2年間の研究内容を紀要にまとめることができた。本園で大切にしていることを職員間で改めて確認し合うとともに、発信した内容を様々な人に受け取ってもらえるよう、文言や体裁について丁寧に検討を重ねた。</p> <p>・対話型マップ記録については、「保育を綴る」という書籍にまとめ、3月に刊行予定となっている。保育記録の新たな提案について、本園での取り組みを発信したいと考えている。</p> <p>・保育内容「人間関係」の教科書への執筆、文部科学省に要請を受け、幼保小接続期の理解増進事業に協力し、事例提供し、出版物の発行に携わった。</p>	
	6. 各種研究会等への協力・支援	<p>・オンラインによる研究会への各教師の主体的な参加に加え、創立記念のための休園日を活用し、他の幼児施設などを視察した。</p> <p>・今年度も引き続き、「のびのび子育てサロン」を大学と三園で協力して開催し、地域の子育て支援に貢献した。</p> <p>・保育学会への参加を通して、多様な実践や研究に触れたことで、自身の保育を振り返ったり、新たな視点を得たりする機会となった。</p>	
	7. その他	・創立150周年に向けて、歴史資料から学ぶ機会を設けていきたい。	

2024年度 学校評価(自己評価)まとめ (・成果と*課題)

<教育課程>

- ・教育目標(子どもへの願い)に関しては、年度当初に保護者と共有し、その後も保護者会等において、共通理解を深め、子ども理解や保育内容の充実につながるよう努めた。
- ・学内のこども園、いずみナサーとの三園合同研究会では、継続することで、子ども理解を深める対話の場となっている。
- *教育課程については、子どもの育ちや暮らし、遊びの様子など実際と照らしながら、随時修正、加筆していく。
- *保護者アンケートに寄せられた保護者の声を受けとめ、保護者が安心して悩みや戸惑いを相談できる園の体制作りにも引き続き努め、子どもを中心に園と家庭とが横並びで子どもの育ちを支える関係作りがなされるよう具体的な対策について検討、提案する。

<学校運営>

- *少人数体制での仕事のありようについて、さらなる工夫をし、個々人の負担感の軽減を目指すことで、働き方改革が推進できるようにする。
- *園庭、園舎内の環境について、安全安心を第一に、引き続きの点検を丁寧に行い、随時修理改善を進めていく。

<大学との連携>

- ・大学の講義や、観察実習の場として、積極的に協力し、学生の実践的な教育に役立てるよう貢献した。学生の声や記録などを通し、園側も学びを得ることで互恵性のある連携を図るよう努めた。

<社会貢献>

- ・ICT活用事例をまとめた書籍や保育内容「人間関係」の教科書への執筆、文科省刊行書籍への事例提供、そして2年間にわたる研究テーマ「つくるが生まれる暮らし」を紀要にまとめ発行するなど、本園の教育理念や研究について積極的な発信に努めた。
- *文京区など近隣地域の保育施設への研究内容の発信、及び、共に保育を語り合う研究会の開催などを検討していく。
- *引き続き、保育に支障のない範囲で、国内外の参観者を受け入れることで、日本の保育の特徴を発信し続けるのと同時に、子どもたちにとっても異文化に触れ、学ぶ機会となるよう努めている。